

特集 命どう宝

―首里戦線と遺骨収集を体験した私が伝えたいこと―

15歳という年齢で、在郷軍隊の一員として激しい首里戦線を経験した翁長安子さん。終戦後のわずか翌年から、まだ朽ちていない遺骨を真和志村民の人々と収集し、三つの慰霊碑建立に関わりました。

翁長さんの証言から、戦争の恐ろしさ、平和の尊さについて改めて考えてみましょう。

取材▼秘書広報課 ☎862-9942



翁長 安子さん(92歳)

1929年(昭和4年)、首里市桃原町出身。真和志村寄宮で育つ。県立第一高等女学校(現在の首里高校)入学後、沖縄戦を経験。捕虜となり、糸満市米須で糸満高校真和志分校に編入学。その後、首里高校に編入学。沖縄文教学校を卒業後、44年間那覇市内で小学校教諭を勤める。定年退職後、語り部として様々な場で、沖縄戦の悲惨さ、平和の尊さ、命の大切さ(命どう宝)を伝えている。旧姓善平。

軍国少女だった15歳の私

私は、8人家族の長女として旧真和志村寄宮で育ちました。父は農園を営み、その野菜を日本軍に卸していたことや、2人の兄が出征していたこと、学校での皇民化教育の影響で、私は軍国少女に育ちました。



昭和18年、13歳で県立第一高等女学校に入学。昭和19年10月には十・十空襲があり、沖縄戦が近付いてきた昭和20年、家族は県の命令で北部に疎開することになりました。15歳の私は家族の反対を押し切り、志願して特設警備第223中隊永岡隊(以下、永岡隊)に入隊しました。看護訓練を受けていなかったたので、水汲みと炊事のお手伝いが主な役割でした。

米軍によるすさまじい馬乗り攻撃

部隊は4月中旬から40日間ほど、ナチジナムイの壕(首里観音堂近く)で過ごしました。高台でしたので、シュガーローフの日米の激しい戦闘で多くの日米兵が死ぬところを目にしたのを覚

えています。

5月18日、部隊が安國寺(首里寒川町)の壕へ移動した後、米軍による首里への攻撃は激しさを増していきました。

5月29日、ついに永岡隊がいる壕へ戦車による火炎放射や黄燐弾による馬乗り攻撃があり、必死の思いで壕から這い出ると、周りは死体の山。首だけが壁にくっついていたり手足が周りに飛び散っていたり、内臓が破裂した人もいて、地面はまさに血の海でした。米兵の自動小銃により私も背中を負傷し、背中をさわると手にべつとりと血がついたので驚きました。一日中飲まず食わずでしたからひどく喉が渇いて、湧き水がある所(仲之川)に行きました。そこには2人の死体が浮いていましたが、それを避けて池に顔を突っ込んでぶがぶと水を飲みました。

水を飲むと出血がひどくなったので、三角巾で止血し、背中の傷が痛むなか、ほふく前進で日本兵の死体が行くところ転がる道(現在の金城町石畳道)を必死に進みました。途中、金城橋が破壊されていることに気付き、先に進めなくなった私は絶望し「お父さん、お母さん助けて!」と大声で泣き叫びました。川をよく見ると丸太がかかっているのを見つけ、命拾いした気持ちでした。



米兵第6師団のダイナマイト攻撃を受ける日本軍の洞窟陣営(首里防衛洞窟)(那覇市歴史博物館提供)

6日間かけて首里から糸満へ

1人きりで首里の戦場から南風原、東風平を進んだ後、東風平国民学校の前で倒れているところを、たまたま通りか

かった近所のおじさんに助けられ、八重瀬の野戦病院で背中への傷の治療を受けることができました。

その翌日、首里戦線で肩を負傷した兵隊さんと、かかとを負傷した兵隊さんとの出会いがありました。どちらも傷口からはウジがわいていて、私とそのウジをススキの根っこを使ってかき出しました。その2人と一緒に3日間かけて糸洲まで進み、轟の壕(糸満市伊敷)で部隊の永岡敬淳隊長と再会した時は、父親と再会したような気持ちでした。

ついに総攻撃の日、隊長からの忘れられない言葉

永岡隊長との再会の喜びも束の間、6月10日頃から米軍による糸満への攻撃が激しさを増し、戦車の火炎放射砲でキビ畑や壕が焼き払われました。6月18日、私を含めた3人で水を汲みに壕を出た直後、艦砲射撃を受け、私の目の前で2人が即死しました。私も着弾の衝撃で数日間の記憶がありません。

山城(糸満市)の壕へ移動し、そこでは5日間、鍾乳洞から落ちる雫と乾パン2、3個、岩壁の石をしゃぶってわずかな塩をなめて過ごしました。

6月22日、「本日総攻撃があり、女性には足手まといになるので壕から出すように」との命令が出ました。暗い壕の中、永岡隊長は1人1人と握手をして「君たちは若い、死んではいけない!生きてこんな戦があったことを語ってくれ!捕虜になりなさい」と言いました。私も「こんな暗い壕の中で死にたくない、地上でお日様の光を浴びて水もたっぷり飲みたい」と思い、捕虜になることを決意しました。



特設警備第223中隊 永岡 敬淳少佐(安國寺提供)

収容所でのつらい捕虜生活

捕虜になり石川(うるま市)での収容所生活が始まりました。孤児の私は寝る場所も確保できず、野宿生活が2か月間続きました。1日おきに3キロ先の栄野比まではだしてイモを堀りに行き、引き換えにもらえたのが、おにぎり、イモ、缶詰が1つずつ。これが2日分の食糧でした。真夏の炎天下のなか、はだしで頭はシラミだらけ、服と下着も1着だけ。風呂はなく海で水浴びする生活でした。ついに日射病にかかり病院に運ばれ、そこでやっとシラミ駆除と服の着替えをもらうことができました。

真和志村民、摩文仁村で遺骨収集作業を開始

昭和21年1月、「真和志村民は摩文仁村米須に集まるように」と知らせがあり、県内11地区の収容所にいた村民が集められました。私は家族や友人と再会できる喜びと、7か月前の激戦跡地に行く恐ろしさで胸がいっぱいでした。米須では先発隊のみなさんが迎えてくれ、そこで母と妹と1年ぶりに再会することができました。

原野にテント小屋が建てられ、野ざらしの遺骨を見ながらの生活が始まりました。真和志村の金城和信村長は、その遺骨を放置することはできず、米軍に何度も交渉し、ついに遺骨収集作業の許可が下りました。早速、村民たちによる収骨隊を編成。2月には糸満高校真和志分校が開校し、翌月からは私たち高校生も作業に参加しました。

戦後初の慰霊碑「魂魄の塔」

遺骨を触る際は、必ず「グブリーサビラ(失礼いたします)」「ウンチケーサビラ(ご案内いたします)」と合掌しました。ミイラ状態になっている遺体を崩してカマスに収容するのが大変でした。拾ったお骨は米須海岸近くの自然洞窟を利用した納骨所に納めました。予想以上に遺骨が増えたので、周りを石と土で積み上げ帽子をかぶせたような納骨墓が建てられました。その塔は、金城村長により「魂魄の塔」と名付けられました。これが戦後初めて建てられた慰霊塔です。